子どもはどのようにして社会を認識し始めるか

How Do Children Begin to Recognize Society?

教育心理学教室　田　丸　敏　高

Toshitaka Tamaru* : How do children begin to recognize society? (Journal of the Faculty of Education, Tottori University, 〈Education Science〉, 1988, 30-1)

問題と目的

社会認識とは，社会的な諸現象を分析し，そこに法則を発見したり，社会について論理的に思考する活動である。子どもは，経験によって，あるいは教育によって，社会認識を始める。しかし，子どもが社会認識し始めようとするとき，そこには特有の困難が待ち受けている。子どもにとって，抽象的な論理を用いることはもちろん困難なことであるが，それ以前に，またそれ以上に，社会を社会として表象することは，子どもにとって困難な課題なのである。社会は社会として，子どもの前に客観的なものとして立ち現れなければならない。社会現象は，自然現象とは異なるし，社会的関係は，個人的な関係とも異なる。また，社会は，単なる空間的場面ではなく，歴史的・文化的存在である。こうした社会について，子どもが表象し，思考しようとするとき，どのような困難に遭遇するのであろうか。その困難はどのようにして克服されていくのであろうか。以上のような問題について，本研究では子どもとの対話資料に基づいて検討したい。

ところで，資料の分析を始める前に，社会認識という心理的活動の基本的性格について検討しておきたい。ピアジェは，認識を同化と調節という2つの概念を用いて説明している。[1] そうした観点からすると，社会認識は子どもがすでに持っているルール（シェマ）を社会現象に対して適用する活動として見えるかもしれない。だとするならば，子どもの持っているルールの発達段階を確定することが，社会認識の発達についての研究の基本的な戦略となるだろう。なぜならば，そのルールの発達段階こそが，子どもの社会認識の全体を規定しているのであるから。しかし，そのルールはいったいどのようにして発生してきたのであろうか。それは，社会認識活動とは別のところで，認識一般の成熟の中で発生してきたものと考えざるを得ない。現に，ピアジェは論理数学的認識を認識発達全体の基本として捉えている。これは，認識の問題を操作の発達に還元する見方である。この見方からは，認識の領域における発達の遅速の特有性は示されても，社会認識活動の特殊性，そこからこそ生み出される発達については何も語ることがなくなるだろう。

活動一般に，いかなる活動が営まれるかということは，活動の手段と対象とによって，客観的に規定されている。最初に，シェマや操作，ルールといったものがあって，それが直接活動を生み出しているわけではない。社会認識において，活動の対象は社会現象であり，活動の手段は概念装置

* Department of Psychology, Faculty of Education, Tottori University.

（言語）である。したがって，まず考えられなければならないのは，社会現象がどのように子どもに表象されているのか，そのときの子どもの概念装置はいかなるものであるのかということであろう。そこから考えられる当面の研究の基本的目標は，ルールの発達段階の確定ではなくて，社会現象を社会現象として表象しようとする際の子どもの心理過程を明らかにすることであり，また，その際子どもの使う概念装置の特徴を示すことである。[2] それは同時に，子どもの社会認識に立ち現れる固有の困難性と特徴とを示すことになろう。

社会現象を前にして，子どもに立ち現れる困難は，当面次の3つに分けて考えることができる。まず第1に，場面の制約による困難である。これは，認識一般に共通する困難であって，認識に際しては必ず特定の場面を越えて一般的に物事を表象することが要求される。小学校低学年頃までの子どもの思考においては，この困難が特徴的である。[3] 子どもは，特定の場面や出来事に縛られ，社会を対象とした思考は生じない。場面的な記述は可能であるが，理論的な判断はまだできない。なぜなら，後者は，事実の客観化と一般化に，すなわち対象化に基づくからである。子どもにとって，与えられた事実を理論的な操作の対象とすることは困難なのである。

第2に，社会現象を自然現象から区別する困難である。自然現象では物と物との関係が問題になるが，社会現象では人と人との関係が問題になる。しかも，人と人との関係は，直接的には立ち現れておらず，物と物との関係の背後に潜んでいる。たとえば，ピアジェ課題の1つ，比重の認識では，直接的・物質的関係が問題となる。大きな石は水に沈み，小さな紙は水に浮く。これを説明するためには，大きさに注目しても，重さに注目しても良さそうである。いずれにしても何か1つの次元に注目すれば済む。しかし，大きな木は水に浮き，小さな鉄が水に沈む。ここに至っては，2つの次元を取り出しその関係を問題にすることが求められる。ここで，子どもは困難に陥る。しかし，この際の困難も実は，同じ物質的関係の中の困難なのである。目の前の木と鉄という物質に注目し，そこからある関係を抽出することによって解決される困難なのである。

ところが，いわしとはまちの価格の違いを問題にするときには，大きさであろうと重さであろうと，はたまた2つの次元の関係であろうと，物質的関係にこだわっていては，いつまでたっても問題は解決できない。物と物との関係の背後に存在する人と人との関係，労働に気づかない限り，問題は解決されない。この際，子どもが乗り越えなければならない困難は，次元が1から2に増えそれらを関係づけるための困難なのではなく，まったく異なって次元を表象しなければならない困難なのである。[4]

第3に，社会的な関係を個人的な関係から区別する困難である。子どもに直接示されているのは個人的な関係である。法律的関係や経済的関係は，子どもの活動の対象とはなっていない。本研究でとりわけ問題にしようとしているのは，この困難である。子どもは社会認識に関する質問を求められたとき，こうした困難にどのように対応していくのであろうか。本研究では子どもとの対話資料に基づいて検討したい。

方　法

対象児　県内養護施設児童　74名（4歳から15歳）
調査日　1987年7月
場　所　各施設の部屋
手続き　1対1で1人当り30分程度のインタヴューを行う。質問内容は社会認識に関わるもので26

項目からなる。質問の仕方は，相手の答え方に対応しながら相手の思考を促すようにして進める。インタヴュー経過は，カセットテープレコーダーを用いて録音し，後で逐語的に起こす。今回報告するのは，その一部であり，お金と社会に関わる問題である。

A．お金持ちになりたいか。どうしたらお金持ちになれるか。みんながお金持ちになれるか。

B．もし，この世の中からお金がなくなったらどうなるか。

C．お金をどんどん造ったら（社会は）どうなるか。

結果と考察

ここでは，質問の種類ごと典型的な対話例を示しながら，子どもが社会を個人的な関係とは区別された社会的な関係として表象しようとするときの特徴と困難とを段階的に明らかにしたい。

A．お金持ちになるには

①子どもにおいて，「お金」ないし「お金持ち」は様々なことと結び付いて，対をなしている。対は個人的経験を基礎にして形成される。

成長したら

U．M．（F）　5．03[5]

Mちゃんはお金持ちになりたいかな？――「うん。」――・・・じゃあな，どうしたらお金持ちになれると思う？――「大きくなったらなれる。」――じゃあな，みんながお金持ちになれると思うか？――「（うなずく）」――じゃあ，みんながお金持ちになるためにはどうしたらいいだろうか？――「わからん。」

本児においては，お金持ちになることは大きくなることと結び付いている。

宝物

K．T．（F）　6．10

お金持ちになりたいですか，Tちゃんは？――「うん，なりたい。」――どうして？――「えーとね，（お金の絵を指して）これね，いーっぱいね，ね，おもちゃが買える。」――じゃあね，お金持ちになったらどんな暮しをしますか？――「えーと，は？」――どういうふうに暮らしますか？――「お金持ちで暮らす。」――・・・――どうしたらお金持ちになれるかな？――「えっとー，宝物で。」

お金持ちは宝物と対になってる。

願望

T．Y．（F）　8．03（R）

お金持ちになりたいと思う？――「はい。」――どうして？――「… 普通の家。」――住みたい。どんな暮らしする，そしたら？――「将来と暮らす。」――将来？うん，そっかー。じゃ，どうした

らお金持ちになれるか？――「… なりたいから。」――どうやったらなれるかなあ？なりたいと思ったらなれるの？――「はい。」――そっか。じゃ，みんながお金持ちになれるの？――「わかりません。」――じゃ，もし，この世の中からお金がなくなっちゃったらどうなると思う？――「… 死ぬ。」――死ぬ，みんなが？みんな死んじゃう？――「犯人を捜す。」

本児は，「なりたいから」お金持ちになれるという。しかし，みんなについて聞かれるとわからなくなる。「お金がなくなる」と「死ぬ」，「死ぬ」と「犯人を捜す」は対になっている。思考は論理に従うのではなく，対にしたがって転移する。

T．R．（F）　10．07（R）

お金持ちになりたい？――「なりたい。」――それはどうして？――「お金持ちになるっていうことは，なんかお金がいっぱいあるから。」――じゃあ，お金持ちだったら，どんな暮らしをする？――「うーん，まず本を買うことが大切だし。」――どうしたらお金持ちになれると思う？――「うーんとね，お金持ちになるっていうことは，お金をいっぱい持っていることだし，大人の人もお金いっぱいだから。」――みんながお金持ちになることができると思う？――「なれると思う。」――そう。どうして？――「なれたらねー，いいでしょう？なれるってことは，みんながお金持ちになりたいからっていうこと。」――ふーん，そうか。じゃ，お金が世の中からなくなったらどうなると思う？――「なくなったらー，先生からお金もらう。」

お金持ちになりたいから，お金持ちになれる。主観的な事態と客観的な事態とが区別されないでいる。世の中からお金がなくなることは本児には想像しがたい。そこで，お金がなくなったときのことを聞かれて，本児は社会的関係を表象し得ず，個人的関係の問題として理解し，先生（施設の職員）からお金をもらえばいいという結論に至る。

労働

子どもは身の回りの経験や伝聞を通じて，お金が労働によって得られることを小さいときから感知している。したがって，お金は労働と対になっていることが多い。

K．T．（M）　5．09

みんながお金持ちになることってできると思う？――「できる。」――じゃ，そのためにはどうしたらいいの？――「えとね，えとね，お仕事。」

お金は仕事と対になっている。

I．R．（M）　7．01

Rちゃん，お金持ちになりたいかな？――「（うなずく）」――なりたい。じゃあ，どうしてなりたい？――「だってねえ，欲しい物がいっぱい買えるけえ。」――… Rちゃんがお金持ちになったとするよ。そしたらね，どんな具合いに暮らそうか？――「遊んで暮らす。」――仕事せんか，遊んで暮らす？――「する。簡単な仕事だけする。」――・・・どうしたらお金持ちになれるかな？――「働いたら。」――・・・回りの人みんながお金持ちになれるかな？――「わからん。」――なんで

わからん。Rちゃんだけがお金持ちになれるのかなあ。回りの人はどうかなあ？――「なれる。」――だったらね，どうやったらなれるかなあ？――「他の人も働く。」

本児では，お金は働くことと結び付いて考えられる。働くとお金持ちになれる。それは，誰もそうである。しかし，お金持ちになったら，遊んで暮らすか，働いても簡単な仕事だけという。ここにもすでに大人社会の労働観が現れている。

貯金

貯金も子どもが日常経験することである。ここから，お金持ちになるためにはまず貯金が必要と考える子どもが現れる。お金持ちは，たびたび貯金と対になっている。

K．I．(F)　6．09

どうしたら，お金持ちになることができるかな？――「(沈黙)」――どうやったら，お金持ちになれるんだろう？――「お金，貯める。」――うん，そっか。じゃ，みんながお金持ちになることできるかな？――「みんながね，お金をね，貯めたらできる。」――そっか。じゃあね，もし，この世の中からお金がなくなったらどうなると思う？――「貧乏になる。」――誰が？――「わかりません。」――わかりませんか。じゃあ，どうして貧乏になるのかな？，――「お金がなくなるから。」

お金持ちにはお金を貯めるとなれる。そして，お金がなくなったら貧乏になる。本児の論理は明快である。しかし，そこに閉じこめられていて，発展はない。

N．K．(F)　8．09

お金持ちになりたい？――「なりたい。」――どうしてなりたい？――「あんな，ドレスやあが着れるけ。」――そうか。お金持ちだったらな，どんな暮らしをする？――「楽しい暮らし。」――どんな？――「えらく偉いなあ，な，な。」――うん。――「いばる。」――いばる？――「いばって暮らす。」――どうしたらなあ，お金持ちになれると思う？――「どうしたらって，貯めたら。」――お金をか？――「うん。」――じゃあな，みんなお金持ちになれる？――「貯めたらな。」――ふーん。そうか。――「使わずにずっと。」

お金持ちには，お金を貯めればなれる。お金を貯めれば誰でもなれる。本児の思考は社会全体に向かっているわけではない。閉じられた範囲でのみ，行われる。その中では，筋が通っている。

労働と貯金

対は，形成されると他を排除することがあるが，労働と貯金とは同時に伝聞・経験されることが多いので，結び付いて現れる。

M．M．(M)　6．04

どうしたらお金持ちになることができますか？――「仕事をいっぱいやる。」――・・・じゃあね，みんながお金持ちになることができますか？――「ん？」――みんながね，みんな，みーんなお金持ちになることができますか？――「わかりません。」――わかんない？考えてごらん。みんながお

金持ちになれるかな？――「なれると思います。」――・・・それにはどうしたらいいかな。みんながお金持ちになるためには，どんなことをしたらお金持ちになれるかな？――「仕事とか，それとかバスの運転とかいろんなことをするとお金をもらえます。」――・・・――もしね，この世の中からお金がなくなっちゃったらどんなふうになると思いますか？――「また，貯めます。」

お金と仕事，お金と貯めるは，経験から分かちがたく結び付いている。

S．A．(M)　7．08

どうやったらお金持ちになれますか？――「お金使わんかったら。」――・・・みんながお金持ちになることができますか？――「できると思うよ。」――どうしたらいいかな，どうしたらみんながお金持ちになれるかな？――「みんなが？... 金持ち... お仕事ね，お仕事したりね，何も食べずにね，お金だけ残したらいい。」

本児は経験から，あるいは見聞きしたことから，お金を貯める方法についてのある理解を持っている。しかし，それはあくまでも個人的レベルの解決の仕方であって，社会的なことについては思い描くことはできないでいる。

K．J．(M)　8．04

どうしたらお金持ちになることができると思う？――「働いてな。」――うん。――「ようけ働いてな，金をようけもらう。」――じゃあ，みんながお金持ちになることができると思う？――「できる。」――じゃあ，それにはどうしたらいいかな？――「大金持ちの人がな，えっとー，100円ずつな。」――うん。――「あっ，1000円ずつな，払っていく。」――誰に？――「だけな，友達とかな，知らない人に。」――そしたら，みんなお金持ちになることができるか？――「うん。1日な，1日1000円ずつ。」

本児の場合，お金を貯めるのは，一方では働くことと，他方ではお金をもらうことと結び付いて理解されている。後者は，おそらくおこづかいをもらった経験から類推されているのであろう。

銀行

銀行もお金と結び付きやすい場所である。

F．Y．(F)　7．00

どうしたらお金持ちになれるかな？――「銀行にな，何かを届ける。」――うん。何かって何？――「わからん。」

本児では，お金は銀行と結び付いて思い浮かべられている。しかし，実際のつながりについては，理解できない。

F．K．(M)　8．08

どうやったらお金持ちになれるかなあ？なりたくないかもしれんけど。――「銀行から振り出しすればいいだが。」――ああ，振り出しすればいいんかあ。――「振り出しって何？」――今，Kく

んが言ったが。――「うん。わからんけど言った。」――みんながお金持ちになれるんかなあ？――「そりゃあ，なれるんじゃないの。」――全員が？――「全員ってことはないけど。... なれんと思う。」――どうしてなれん人もおるんかなあ？――「わからん。」――どんな人だったらお金持ちになれるかなあ？――「わからん。」――よーく考えてごらん。――「大人の人だったらなれるかもしれん。銀行に行って，取ってくればいいけ。」

本児は，お金を銀行と結び付けてとらえている。「振り出し」というような難しい言葉まで使って，説明を試みている。しかし，その言葉の意味についてはわからず，かえって質問者に質問している。言語はまず使われ，次いで意味が理解される。

②単なる対による思考の基では，個人がお金を貯める方法とみんながお金持ちになる方法とは区別されない。個人がお金持ちになれるのなら，当然同じ方法でみんなもお金持ちになれる。社会は個人の延長線上に考えられている。しかし，経験を積めば，みんながお金持ちではないことがわかってくる。対による思考と現実感覚とは葛藤する。お金持ちとお金持ちでない人とを区別するために，子どもは様々な理由を考える。

偉い人

F．M．(F)　6．10

どんな人がお金持ちになれると思うかな？――「学校とかで一番偉い人。」――ふーん。じゃあね，みんながお金持ちになることができるのかな？――「できない。」――できない。どうして？――「お金が少ししかない人がいるけー。」

お金持ちは偉い人と対になっている。また，みんながお金持ちになれない理由として，少ししかない人がいるという事実があげられているのも特徴的である。

H．A．(M)　8．09

どうしたらお金持ちになれると思う？――「働く。」――誰が働くの？――「自分。」――それじゃあな，みんながお金持ちになることはできるかな？――「できん。」――なんで，なんでみんながお金持ちになることできん？――「... 偉い人じゃない。」

お金は働くことと，お金持ちは偉い人と対になっている。

あほ

K．T．(M)　11．00

どうしたらお金持ちになることができるのかな？――「えっとー，働く。」――じゃあな，みんながお金持ちになることってできるかな？――「できん。」――できんか。なんでだ？――「あほはできん。」

「お金持ちになること」と「働くこと」，「お金持ちになれないこと」と「あほということ」が，本児の中では結び付いている。

きれいな服と汚い服

Y．K．(F)　8．06

どうしたらお金持ちになれると思う？――「お金をもらったらお金持ちになる。」――誰からもらう？――「神様。」――じゃあ，みんながお金持ちになれる？――「なれん。」――なんで？――「あんなあ，汚い服だけ。」――汚い服の人はお金持ちになれん？――「うん。」――じゃあ，きれいな服着とったらお金持ちになれる？――「うん。」

対による思考は，容易に原因と結果が入れ替わる。「お金持ちでない」から「汚い服を着ている」ということは，「汚い服を着ている」から「お金持ちでない」となる。そこから，「汚い服を着ている」から「お金持ちになれない」という考えになり，「きれいな服を着ている」ならば「お金持ちになれる」ということが導かれる。思考は論理的ではなく，まだ場面的である。

心がけ

O．A．(M)　10．00

みんながお金持ちになることができるかな？――「わからん。」――どう思う？みんながお金持ちになることができるかな？――「人もいるし，できない人もいる。」――できない人もいるし，できる人もいる。ふーん，どうしてできる人とできない人がいるの？――「わからん。」――考えてみて。――「自分。自分しだいっていうけどよくわからん。」

本児も，何か判断する際には，何か基準が必要なことは感じている。人から，「自分しだい」ということは聞いている。しかし，それを納得できずにいるし，また，納得できないでいることを他人に表現できるようになってもいる。

労働の質や量

労働の質や量の違いにより，お金持ちとお金持ち出ない人を区別するのは，子どもによく現れるもっともらしい考え方である。大人であってもこうした考え方はたびたび現れる。

K．T．(M)　9．10

どうしたらお金持ちになることができるかなあ？――「なんか... いろんな物を売ってお金儲けして。」――どんな物売る？――「わからない。」――じゃあね，みんながお金持ちになることができるかなあ？――「はい。一生懸命働いたらお金持ちになることができるんじゃないかな。」――みんなが？――「わからない。」――そうか。――「お金持ちになる場合もあるけど。」――ならん場合もあるのか？――「うん。」――じゃあ，なる場合ってどうしたらいいのかなあ？――「一生懸命ね，一生懸命，毎日毎日働く。」――働いてお金を稼ぐのか。何して働くの？――「うーん，なんかね，たとえば，なんか野菜類とかおもちゃとか売る。」

本児は，お金は売ることによって得られるものと思っている。しかし，みんながお金持ちになれていないことも知っている。その理由として，一生懸命働いたかどうかの度合をあげている。このように，ある尺度によって判断を行おうとすることは，未熟なものであっても思考への第一歩と言えよう。

F．K．(M)　10．00
どうしたらお金持ちになれるかなあ？――「一生懸命働く。」――... ――みんながお金持ちになれると思う？――「思わん。」――どうして？――「なまけとる人がいる。」――何になまけとる人だ？――「仕事とか。」――なんでなまけとるってわかるの？――「あそんどる人。」

本児も，お金持ちになるための基準として一生懸命働いているかどうかを持っている。

M．K．(F)　10．04
どうしたらお金持ちになれると思う？――「働いたら。」――働いたら，みんながお金持ちになれるの？――「うん。」――なんで？――「えっとね，すごく働いてね...」――... じゃ，みんなが働いたらお金持ちになれる？――「... みんなが働いたらお金持ちになれるってことじゃないかもしれん。」――どうして，みんなが働いたらお金持ちになれるんだ？――「いろんな物を運んだりして，すごい働いてね，お金がもらえんかもしれん。」――どうして？――「えっとね，あれね，あんまりね，働かん人がいるかもしれん。」

本児は，働くこととお金とを結び付けて考えている。また，お金持ちになるには，ただ働くだけでなく，「すごい働く」必要を感じている。しかし，すごい働いてもお金がもらえないかもしれないとも感じている。その理由を問いつめると，思考が後退して，働かない人を思い出す。

K．M．(M)　10．11
どうしたらお金持ちになることができると思う？――「一生懸命働く。」――みんながお金持ちになることができると思うか？――「いやー。」――どっちかと言えばどう思う？――「なれん。」――なれん，なれる，どっち？――「なれん。」――じゃあ，それはどうしてなれんのかなあ？――「あんまり，はたら...」――あんまり？――「あんまり働いてない。」

お金持ちになるには一生懸命働く。しかし，それだけでやってもどうもうまくいかないようだ。じゃ，どうしてお金持ちになれない場合があるのだろう。やっぱり，あんまり働いていないからか。矛盾を感じながら，本児の思考は堂々めぐりする。予盾を矛盾として意識するためには，論理が必要だ。また，論理が論理として働くためには，「お金持ち」ということと「働く」ということを別々に表象したり，別々の関係の中で考察したりできることが必要である。「お金持ち」ということと「働く」ということとが閉じられた対になっているため，本児にはそうしたことは困難なのである。

③労働を考えることを通じて，子どもは社会全体を客観化するにいたる。個人の意識から独立したものとして社会が表象され始める。社会的関係が個人的関係から区別され始める。

社会全体のお金

N．R．(M)　8．06
どんな人がお金持ちになるのかな？――「働いて，お金儲ける人。」――そしたらね，みんながお金持ちになることはできますか？――「できない。」――どうして？――「それだけのお金はない。」

本児は，お金の全体を思い浮かべる。そこから，みんながお金持ちになることはできないと推論する。なぜなら，世の中にそんなにたくさんのお金はないはずだからである。

社会全体の規則

A．Y．(M)　11．03

大金持ちになりたい，やっぱり？――「うん。」――なんで大金持ちになりたいのかなあ。さっきも言っとったなあ，貧乏だけーか？――「うん。」――じゃ，お金持ちになったらどういう暮しをする？――「まず貯めておいて，えと，必要な物を買って，毎日おいしい物を食う。」――ああそうか。必要なもんてどんなもんだ？――「冷蔵庫とか掃除機とかいろんな物。」――じゃあ，どうやったらお金持ちになることができるかなあ？――「無理だ。」――どうやってもなることができんか？――「宝くじでなあ，1等になる。」――なるほどなあ。もう他にはなる方法はないかなあ？――「ない。」――じゃあ，みんながお金持ちになることができる？――「できん。」――できん，なんで？――「貧乏の人がおったらな，えと，ん，何千人に1人とかだけ。ふつうめったにおらんと思う。」――何千人に1人しかなれんのんか？――「2人とか，数人しか。」――なれんもんなのか？――「たぶん。」――だけー，それでみんながお金持ちになれないのかなあ？――「だけ，みんながなりたがって。」

本児の思考はある意味では現実的である。本児は，世の中にあまりお金持ちのいないことを知っている。そういう現実がある以上簡単にはお金持ちにはなれない。宝くじでも当てる他はない。大人でもこのように考える人は多い。現実がなぜ現実であるのか。現実を現実たらしめているものは何なのか。そこに，思考が向かうためには，さらに加えて科学的な態度が必要である。

働く場所の制限

M．S．(F)　11．07

お金持ちになりたい？――「なりたくない。」――なりたくないか。じゃあ，お金持ちになりたい人がおったとするが，いったいどうしたらお金持ちになれると思う？――「えっとね，自分で働いたりして，お金を貯める。」――働いて，お金を貯めたらお金持ちになれるだか？――「んー，うん。」――そうか。じゃね，みんながお金持ちになることできる？――「ううん。」――できないの。じゃ，どうしてできないの？――「えっとね，全員が働くことはあまりできないし，みんながまた，働けるってわけでもないし... そいでね，働いたりするの... それで，全員が働くことはできない。」――全員が働くことができないからお金持ちになることはできないのか？――「うん。」――どうして全員が働くことができないのかな？――「まだ子どももいるから。」――じゃ，働ける年齢になったら，みんなが働ける？――「働く場所そんなにたくさんない。」――どうしてたくさんないの？――「えっと，みんながお金持ちをほしいから，いろんなとこ行って働いたらなくなってしまう... みんなが。」

本児は，働くということを基準尺度にして判断することができる。働ければお金持ちになれるし，働けなければお金持ちになれない。思考は，一貫している。それでも，働けないときの理由を質問されると，「子どももいるから」ということで思考は別の方向にそれてしまう。さらに，追求されると，「働く場所がそんなにない」ということで論理的にもっともらしい理由を考え出す。こうした能力を本児はすでに持っている。

B．この世の中からお金がなくなったら

①ここでの質問は，「君のお金がなくなったら」ではなくて，「世の中（社会）からお金がなくなったら」どうなるかである。それでもなお，子どもは自分のことを考える。子どもは，個人的関係から区別して社会的関係を考えることは難しい。

同語反復

M．S．(M)　4．07

この世の中からお金がなくなったらどうなるかな？――「...」――じゃあね，この世の中からお金がなくなったらどうなるかな？――「なくなる。」――うん？――「お金がもうなくなる。」

同語反復。未だ始動していないが，始動しようとしている思考。

個人的場面の表象

N．S．(F)　5．09

もしもこの世の中からお金がなくなったらどうなるかな？――「買えん。」――え？――「買えん。」――何が買えないんだろう？――「なんにも買えん。」――・・・誰が買えないのかな？Kちゃんかな？――「うん。Kちゃんまんだお金ある。」

個人的な問題としてだけ表象される。

F．T．(M)　6．02

もし，この世の中からお金がなくなったらどうなると思う？――「誰かからもらう。」――誰かからもらう？どこにもなかったらどうする？――「どろぼうから返す。」

「お金がなくなる」ということから，「もらう」とか「どろぼう」のイメージが喚起される。幼児の場合こうした個人的なイメージから離れることは困難である。

F．Y．(F)　7．00

もしもこの世の中からお金がなくなったらどうなると思う？――「いやな気持ちになる。」――そうか。それはなんで？――「わからん。」

まず，主観的な印象が現れる。それが，客観的な考えを妨害する。

食べれない

S．A．(M)　7．08

この世の中からお金がなくなったらどうなると思いますか？――「お金がなくなったら？」――うん。――「ごはんが食べれん。」――世界からお金がなくなったらどうなるかな？――「世界中？」――うん。――「どろぼうつかまえる。」

問題は主観的に把握されている。

I．R．(M)　7．01
もし，みんなが暮らしている所からお金がなくなっちゃったらどうなるだろう？――「食べ物が食べれん。」――お菓子も食べれんようになっちゃうか？――「ごはんも。」――じゃあ，他にどうなるかな？――「死ぬ。」――じゃあ，回りはどうなるかな？学校の人はどうなるかな？――「悲しむ。」――そうか，食べ物がなくなる他に何かあるかな？――「畑，畑がね。」――畑が？――「畑ってお金がないときにできたんだ？」――どうかなあ？――「できるよ。水まいたら。」――あら，水まいたらできてくるか？――「大根とか，芋とかができてくる。」

社会的な問題一般としては，思考されない。個人的な出来事を考える中でいろいろなことが思い浮かべられるが，あくまで場面としてである。食べ物と畑の対を通じて，話は別の方向にそれていく。

死

H．M．(M)　9．03
もしこの世の中からね，世界中からね，お金がなくなっちゃったらどうなると思いますか？――「いやだ。食べ物はなくなったり，死んでしまう。」――お金がなくなったら死んでしまう。どうして？――「飲み水があるなら生きられるけど，いろんな食べ物がないから，お金で買わないとないから，だから...」

お金は食べ物と結び付いている。

N．K．(M)　10．08
もし，この世の中からお金がなくなったらどうなると思う？――「死ぬ気になる。」――どうして死ぬ気になるかな？――「金がないから，何も買うもんがない。」

お金がなくなるということは，子どもには深刻なことなのである。それは，死と結び付いている。

②「お金がなくなる」―「食べ物がなくなる」，「食べ物がなくなる」―「死ぬ」というように，子どもの思考は対に沿って進む。お金がないことの様々な場面を想像したり，経験したりできるようになると，子どもはいろいろの人のことのことを考えるようになる。

人

T．H．(M)　9．01
もしも，この世の中からお金がなくなったら，全部，どうなると思う？――「ん... 変なふうになる。」――変なふうってどんなふうか？――「あのな，あんまりな，いろんな物がなくなったりな，あの，人が死んだりする。」――人が死んだりする？――「だってな，もしお金がなかったらな，なんにも食べれんしな，水も飲めれんしな，だけえ，死んだりすると。」

お金は食べ物と，食べ物は死と結び付いて思考される。対に沿った思考ではあるが，自分だけでなく他の人のことも表象され始めている。

T．M．(F)　8．10
もしも，この世の中からお金がなくなったらどうなると思う？――「貧乏になる。」――誰が？――「みんなが。」

問題を「みんな」に関わることに広げている。

貧乏な人とそうでない人
N．M．(F)　8．09
世の中からお金がなくなっちゃったらどうなると思う？――「貧乏になる。」――みんながどうして貧乏になる？――「みんながじゃない。使った人だけ。」――使った人は貧乏になる。――「うん，もう全部使った人。」

本児には，世の中からお金が消え去ってしまうことは想像できないことである。本児は，きれいなドレスを買って，お嬢様になりたいという夢を語っている。そのため，お金がなくなってしまうのは許しがたいことなのである。お金がなくなって貧乏になるのは，全部使ってしまった人だけなのである。

他の国
F．M．(F)　6．10
もしこの世の中からお金が全然なくなったらどうなると思う？――「他の国からもらう。」――どうして他の国からもらうのかな？――「食べ物がなくなるから。」

「他の国」を持ち出すことにより，社会的な解決を考えているように見えるが，個人的な解決の類推に留まっている。

お店屋さんが困る
K．T．(M)　9．10
もしも，お金っていうものがこの世の中からなくなっちゃったらどうなるかなあ？――「...」――君今お金持っている？――「うん。」――そのお金なくなっちゃったらどうなる？――「何も買えなくなる。」――それはどうしてかなあ？――「なんか，お金がないとねえ，10円とか100円とか1000円とか... お店の人が困る。」――お店の人はどうして困る？――「お店屋さんの人もなんか買うんじゃないかなあ。」――お店の人もなんか買うのにお金がないと困るの？――「お店屋さんの人もなんか買わんと物が売れなくなっちゃう。」

本児はお金の社会的機能を考え始めている。「お店屋さん」という小社会を通して，個人的な問題から社会的な問題へと渡っていくことが可能になっている。

③様々な場面を考えることを通じて，子どもは社会全体を意識し始める。社会的関係は個人的な関係と区別されて客観化される。

社会的な出来事への意識

M．S．(F)　11．07

もし，この世の中からお金がなくなっちゃったらどうなると思う？――「食べ物とか着る物とか困ってしまう。」――どうして，食べ物とか着る物とか困っちゃうの？――「お金で着る物や食べ物買ったりする。」――じゃ，他にお金がなくなったらどうなると思う？――「家がなくなる。」――だって，建っている家がなくなるの？――「ううん，家とかも買えない。」――ふーん，どうしてお金がなくなると家とか買えないの？――「えっ，家がほしいとお金がないと買えない。土地も。」――他には，お金がないとどうなるかわかる？――「うーんとね，お金がなかったらお店がなくなっちゃう。」――お金がなくなったら社会はどうなっちゃうかな？――「めちゃくちゃになる。」

本児は，はじめお金は着る物や食べ物と結び付いて考えられている。しかし，様々な場面を思い浮かべる能力を持っている。家のこと，土地のこと，店のことを考える。そして，社会について質問されたとき，「めちゃくちゃになる」として，全体に言い及ぶ。

物々交換

T．N．(M)　11．03

もし，この世の中からお金がなくなったらどうなると思う？――「うーん，なんか物々交換じゃないの，また。」

本児は歴史の知識を用いている。当然のことのように問題を社会的なものとして考えている。

T．Y．(M)　11．06

この世の中からお金が全然なくなっちゃったらどうなると思う？――「わからん。」――今お金持っている？――「どこに？」――ポケットに。――「ない。」――なかったらどうなる？――「どうしようもない。」――何をどうしようもない？――「何も買うことができない。」――買うことができなくなる，たとえば？――「食べ物とか。」――あー，食べ物とか買うことができなくなる。他には？――「...」――ファミコンとか買うことができる？――「できない。」――じゃあ，お金がなくなったら何も買うことができなくなる？――「うん。お金がないから。」――・・・お金以外の物じゃ買うことができない？――「昔みたいにとりかえっこする。」――ああ，そうか。とりかえっこ？――「物々交換。」

本児は，はじめはお金がなくなったらどうしようもないと思っていた。しかし，「お金以外では？」という質問に促されて，物々交換という社会的な知識に思い至った。

K．T．(M)　11．00

もしも，この世の中からお金がなくなったらどうなると思う？――「ん？物がただになる。」――どうしてただになっちゃう？――「うーん，ただであげんともったいない。」――もったいないか。そうか，よし。――「えっ，使うときに使う。」――使うときに使う，何を？――「えっ，物を。」――物を使うときに使うの？――「えっ，物がいるときに使う。」

知識としては間違っているが，問題は社会的に把握されている。

お金の代替物

A．Y．(M)　11．03

もしな，この世の中からお金がなくなったらどうなると思う？――「んー，全部なくなっちゃう？石で，石。」――石で？――「石で値段を書いて。」――お金の代わりにするの？――「削る，石を。」――ああ，石を削って？――「そうして，札がないけ，札はなしに石だけ。」――石で物を買ったりする。ああそうか。――「勝手に造ったらなー，死刑。」

歴史の知識を頼りながら，本児は社会的に考えようとしている。

社会現象

N．H．(M)　11．05

この世の中からお金がなくなったらどうなる？――「なんでもただになる。」――ただになる？――「いや，決められたもんしかもらえんようになる。」――決められたもんしかもらえんようになるか？――「そんな感じじゃないか。他のもんをお金に替えたりな。」――物々交換か？――「うん。」――じゃ，世の中じゃどんなことが起こるかいな，お金がなかったら？――「別に何もおこらん。戦争が起こる。いや，起こらん。どっかの国が一人でお金を持っとったら，取り合いで戦争が起こる。まあ，そんなとこ。」

本児は，社会的な様々な事態を想像できる。また，それが生じる条件についても考える。

F．N．(F)　11．05

もしも，この世の中からお金がなくなったらどうなると思う？――「みんな区別されなくて済むと思う。」――あっ，そう。今区別されているのかなあ？――「なんか，区別みたいのがあるって聞いた。」――お金で？――「うん。」――じゃあね，みんなが差別されなくなるっていうのはなんで？――「それだけお金がないと，そのー，お金持ちだったらお金がなくなることはないし，貧しい人だって前からお金がなかったのだから，それで公平になる。」

聞いたことを自分の知識として組み立てて使うことができるようになっている。

C．お金をどんどん造ったら

①お金は経済的関係の媒介手段であるから，お金をどんどん造ったらどうなるか聞かれたときは，社会について聞かれていることになる。しかし，子どもは，社会を表象することは困難である。子どもが考えるのは，個人的な関係であり，それは子どもの限られた経験に基づいたものである。

保管場所を考える

U．M．(F)　5．03

（お金の絵を見せながら）これはな，何に見える？――「紙。」――紙。これはな，実はな，お金なんだがな。じゃあな，お金はなあ，どこで造っていると思う？――「会社。」――会社かあ。どこ

の会社だろうか，どこの会社で造っとるんかなあ？――「んとなー，Mの所のなあ，Mの所の近く所。」――じゃ，お金は好きなだけ造っていいと思うか？――「んー，造っとる。」――ん？――「好きなように造っとる。」――ふーん，じゃあ，どれだけな，お金を造るかっていうのはな，誰が決めるんだろうかなあ？――「... 会社のおじさん。」――じゃあな，もしな，お金をどんどん造っていったらなあ，どうなると思う？――「んとなー，困っちゃう。」――困っちゃう。誰がどうして困っちゃう？――「えっとな，いっぱい持っとったらなあ置けれんくなっちゃう。」

お金を造るのは会社のおじさんであり，お金をいっぱい造ったら置いておく場所がなくなり困っちゃう。本児は，限られた経験に基づいて想像する。その想像は，個人的な場面に限定されている。社会的な関係を表象することは，本児にはまだ及ばない。

I．T．(M)　7．01

（お金の絵を見せながら）これ何？――「千円。」――千円がいっぱい。これお金だけれど，お金はどこで造っているのかなあ？――「わからない。どこで造っとるのかなあ。わからん。」――じゃあな，お金をいっぱい造ったらどうなる？――「財布に入らない。」――それよりいっぱい造ったら？――「ポケットにも入れる。」――そんなにいっぱい造ったらどうなるだろうか？――「財布をいっぱい集める。」――お金をどれだけ造るかは，誰が決めると思う？――「わからん。わからんな，大工さんでもないし。」――じゃあね，お金をどんどん造ったらどうなるだろう？――「人にあげる... えっとねー，誰が造るのかなあ... えっとねー，工場のおじさん。」

本児も個人的な関係以上のことを思い浮かべることはできない。お金を誰が造っているか，本児は一生懸命に考える。次の質問に移っても，そのことが頭に残っている。こうしたことは，子どもにはよくある。

F．M．(F)　6．10

（お金の絵を見せながら）これは何？――「お金。」――うん。じゃあね，お金はどこで造っていると思う？――「(首を振る)」――わからない。じゃあね，このお金を造っている所では，お金を好きなだけ造っていいのかな？――「(首を振る)」――だめ。どうして？――「いっぱい造るとね，いらない人やね，いる人がいるからね，いっぱい余ったらいけんけー。」――そっか。じゃあね，どれだけお金を造るかは誰が決めると思う？――「偉い人。」――偉い人。じゃあね，もしもお金をどんどんどんどん造ったらどうなるかな？――「そう造ったらね，人たちが困る。」――どうして困るのかな？――「造りすぎるとね，あのね，工場がね，いっぱいになるから。」――いっぱいになるからか。じゃあね，もしお金をどんどんどんどん造っちゃったら，みんながお金持ちになれるのかなあ？――「なれる。」

いっぱいあると余って困るというのは，日常生活の中でよく経験することである。本児もそうした経験に依拠しながらいろいろと考えをめぐらしている。難しいことを決めるのは「偉い人」とされる。お金をいっぱい造ったらみんながお金持ちになれることについて，疑問はない。

神様・偉い人

M. M. (M)　6．04

お金を誰が造れって決めるんでしょうか？――「神様。」――・・・じゃあね，お金をどんどんどんどんいっぱい造ったらどうなるでしょうか？――「いろんな物が買える。」――いろんな物が買える。みんなお金持ちになれる？――「(うなずく)」

本児は，あらゆる力のある神様を持ち出す。しかし，表象できるのは，個人的な関係である。したがって，お金をどんどん造ることによって，個人がお金持ちになれるようにみんなもお金持ちになれる。社会的な問題には考えが及ばない。

S．A．(M)　7．08

東京ではね，お金を好きなだけ造っていいでしょうか――「いけん。」――どうして？――「お金持ちになるけん。」――お金持ちになっちゃうからいけん？――「うん，いけない。」――じゃあね，どれだけお金を造るかは誰が決めるんでしょうか？――「決める？」――うん。――「偉い人。」――偉い人って誰だろう？――「世界一偉い人。」――うん，誰？――「うーん，男の人。」――世界一偉い男の人ってどんな人だろう？――「えっとね，頭もちゃんといいしね... 頭もちゃんといいしね，背が大きい。」――・・・――機械でお金をどんどんどんどん造ったらどうなるでしょうか？――「お金がたくさんになる。」――うん。そしたらどうなる？――「みんながもらう，お仕事して。」――そしたら，みんなお金持ちになる？――「うん，なる。」――・・・――もっといっぱい造ったら，もっとみんなお金持ちになるなあ？――「うん。」――じゃ，もっといっぱい造ればいいのになあ。なんでもっと造ってくれないんだろう？――「知らん。」

社会は，目的論的に，あるいは人工論的に捉えられている。この点自然現象の認識と同様な様子を示している。本児が表象しうるのもやはり個人的な人間関係であり，社会的な人間関係はまだ手の届かない所にある。

I．K．(M)　9．01

(お金は) どこで造っとるんだろう？――「鉄で造る。そいで紙，1000円は紙。」――うん，そうだな。どっから (『どこで』の方言)，造っとるだろう？――「工場。」――・・・――その工場は，お金を好きなだけ造っていいのかな？――「うん，いっぱい造る。」――いっぱい造るか。じゃ，それは，――「なるべく遠い所，トラックで運んで。」――お金を？――「自転車とか。」――うん。じゃ，お金を造るっていうのは，誰が指示しよるだ？誰がお金を造りなさいっていうだろう？――「言わんでも造らんと死ぬ。人間が生きれん。すぐ赤ちゃんが生まれた，あ，すぐ自分がね，神様がつくったってね，そいで，ごはん食べんか... お金なしでね，ごはん買えれんけんね，食べんかったら死ぬ。」――・・・お金をな，こんな工場でいっぱい造ったらどうなるのかな？――「造っていって，えと，働いている人にあげる。全員にあげる。」――じゃ――「最初は働いとる人にあげて，後から全員。大人の人に。」――大人の人にいっぱいあげたら，みんなお金持ちになるかな？――「うん。」

本児には，「お金はなかったらみんな死んでしまう」という前提がある。だから，誰かが命令しな

くとも，自発的にお金は造る。造ったお金は，はじめ働いている人が取得し，その後全員に与えられる。子供の世界は「合理的」である。

外国

T．Y．(F)　8．03 (R)

お金はどこで造っていると思う？――「国から（『国で』の方言)。」――国でか。じゃあ，お金は好きなだけ造ってもいいのかな？――「はい。」――うん。じゃ，どれだけお金を造るかは，誰が決めると思う？――「そこの国の人。」――そうか。お金を造る所って，国のどこにあるのかな？――「オーストラリア。」――オーストラリア？――「はい。」――ふーん。じゃあ，お金をどんどん造ったらどうなると思う？――「それは自分のものになる。」――じゃあ，みんながお金持ちになれる？――「なれる。」

お金はどこで造られているかのような経験を越えた問題に対しては，よく外国が持ち出される。ちょうど偉い人や神様が持ち出されるのと同様である。造ったら造った人に所有権があるというのは，子どもの世界におけるルールである。

規則

K．J．(M)　8．04

（お金の絵を見せながら）これ，なんだ？――「金。」――じゃあ，お金はどこで造っとるんだろうなあ？――「えっとな，お金屋さん。」――お金屋さんか。それはどんな所だ？――「どういう所ってな，工場みたいなんでな，そいでな，機械がよーけあってな，そいでな，100円とかな1000円とかを造る。」――大きな工場か？――「うん，でっかーい。学園くらいの・・・」――じゃ，どこにある，それは？――「それ？東京とかな，あと... 鳥取とか日本とか。」――うん。どのくらいあるんだろうなあ？――「えっ，高さ？」――ううん，数。――「... えっとなあ... 1，2，3，... 10。」――10カ所あるか。そうか。――「10カ所。」――じゃあね，そこでは，その工場ではね，お金を好きなだけ造っていいのかなあ？――「(首を振る)」――いけん。何でだ？――「決まっとるけな。ちゃんと決まりが決まっとるけ。決まっとるしな。」――何で決まりが決っとるんだろう？――「えっとな，もしな，決まりが決まってないとな，もしな，えっと，えっと，その工場の人の所にな，あとな，どろぼうがおったらな，そしたらな，盗んで帰っちゃうから。」――どれだけお金を造るか決めるのは，誰が決めると思う？――「えっとな，工場の人たちのな，えっとー，なんちゅうかな，えっと，ボスみたいな人。」――その人がね，お金をどんどんどんどん造れって命令して，いっぱい造ってしまったらどうなるかなあ？――「そのお金をな，そのお金はな，会社とかな，うんと，会社とかなんかで渡される。それで... 働いた人たちにお金をやる。あげる。」――じゃあな，そうやって，あげるお金をいーっぱい造ってしまったら，どうなるだろうなあ？――「いっぱい？」――いっぱいにふえてしまったらどうなるかなあ，お金が？――「お金が増えたら？そしたらな，親戚のな，会社とかにいってな，そいでお金を分けてあげる。」――じゃ，そしたらな，みんながお金持ちになれるかなあ？――「みんな？... うん。」

本児は，お金を好きなだけ造ってはいけないという。それは，決まりがあるからと考える。しかし，なぜ決まりがあるか考えることは困難である。「決まり」は「どろぼう」を呼び起こし，思考は

それていってしまう。また，お金が増えることは，それだけで独立した出来事であって，社会的な不都合を引き起こすことはないと考える。社会的な諸関係は，本児にはまだ表象されない。

②子どもは，いきなり社会を客観的なものとして思い浮かべることはできない。
子どもは，まず疑似社会として「小社会」を考える。「小社会」は将来社会を表象する際のモデルとなるものである。しかし，それは，まだ個人的な関係の名残を多分にとどめている。

会社・工場

T．H．(M)　9．01

お金はどこで造っているんだろうなあ？――「会社のな，一番偉い所。」――... ――どこにある，それは？――「わからん。」――いっぱいあるか？――「ん？あのな，お金を造っとる所のな，会社はな，あの他の会社とかな，そういう所にな，あの，出してな，働いとるけー,... してもらえる。」――え？――「あのな，会社の人はな，な，造っとってな，そして他の会社の所に少しな，あげる。」――大きな工場かなあ，大きな会社かなあ？――「... そんなに大きくないと思う。」――何カ所もあるとこかな？――「3カ所ぐらいしかないと思う。」――鳥取県に？――「あっ，あるわ。あのな，倉吉とかな，鳥取とかな，そういう所のな，所にな1つな，会社があってな，そこの所だけな，1つの会社がな，造ってな，米子とかな，そういう所だったらな，あの米子だったらな，米子に1つあって，な，鳥取だったらな，鳥取にな1つある。」――そうか。ふーん。じゃあ，その会社ではお金を好きなだけ造っていいと思う？――「造ったらいけん。」――じゃあ，それなんでかなあ？――「あのな，会社にはな，何人とかな，そういうのが決まっとると思う。」――なんで決まっとるんだろう？――「もし決ってなかったらな，な，お金をな出すときにな，もしな，同じな給料でなかったりやったらな,」――給料って？――「あの，お金でなかったらな，同じお金でなかったらな，少なかった人とかおるけー，ちゃんと決めといた方がな，いいと思う。」――そうか。じゃ，そのどれだけお金を造るかって決めるでしょう。決めるのは誰が決めると思う？――「そのお金を造っとる会社の... あっ，あのな，お金を造っとる所じゃなくてな，違う会社がもらう所でな，あの，一番偉い人でな，あの，会社の中で，その人がな働いとるのをな見て決めると思う。」――じゃ，そのお金を造る工場，会社の偉い人じゃなくて，もらう方の会社の偉い人が決めるんか？――「うん。」――そうか，じゃあ，もしも，もしもだで，その会社でお金をいっぱい造ったらどうなるんだろう？勝手にどんどんどんどん造ったらどうなるんだろうなあ？――「どんどん造ったらな，あの，勝手にどんどん造っとったらな，いけん。」――どうなるんかなあ？――「どんどん造っとったらな，たくさんになっちゃってな，使う所，使うもんがないけえな，使う所もないけえな，あの，そこの会社のな，な，あの，いけんようになっちゃう。」――そのお金を造る会社がいけんようになる？――「うん。」――どういうふうにいけんようになる？――「あんな，会社はな，そこの会社の所はな，あの，あのな，やめちゃったり，あんな，なんか人がな，人に文句言われてな，な，あのな，そこの会社の人がな，どんどん減っていったりな，あの，あのな，会社の人のな，人でもらう人がな，な，なんか『いけん』とかそういうことを言ってな，あの，やめちゃうかもしれんけえな，いけんと思う。」――じゃあね，お金をどんどんどんどん造ったら，みんながお金持ちになれると思う？――「なれない。」

本児は，会社という1つの社会を基にして推理している。お金を造る会社，お金をもらう会社，

会社の偉い人，会社で働く人などを話に登場させて，問題を考察している。お金をいっぱい造っても使う所がないといけないというように，問題は社会的に把握され始めている。しかし，お金の話から給料の話になったり(対の影響)，同じお金でないと少ない人がでてきて困ると考えたり，思考が拡散しやすいことも見られる。これは，前段階の影響であろう。

K．K．(F)　9．00

お金はどこで造っとるんかな？――「お金屋さん。」――・・・――お金屋さんでは，お金を好きなだけ造っていいと思う？――「いけん。数ぶんだけなー，毎日，なんか偉い人が，えーと，偉い人が，あれ，『なんぼだけ造りなさい』って言っただけ造る。」――偉い人って誰だろう？――「あー，校長先生みたいな，園長先生みたいな。」――うん。じゃあ，なんでな，これだけ造りなさいってなあ，造るのが決まっとるんだろうな？――「わからん。」――わからんかー。じゃ，もしもな，その決まりを破ってな，お金をどんどんどんどん造ったらどうなるかな？――「先生やなー，あんな，うんと追い出されてしまう。」――じゃあ，他の人はどうなるかな？――「だけ，しょんぼりしちゃう... あっ，怒る，怒る。なんだ，なんでこんなんでするだあーって怒る。」――うん，じゃ，――「首にされる，首に，首に。」

本児は，お金をどんどん造ったらどうなるかと聞かれて，造った人のことを考える。そして，その人はきっと首になると思う。社会のことはなかなか思いつかず，まず個人的関係を思いつく。他の人はどうなるかと聞かれても，当の先生を囲む回りの人を考える。そして，悲しんだり怒ったりする場面を思い浮かべる。個人的関係が優勢で社会的関係が表象されにくい子供の思考の特徴がよく表れている。

N．K．(F)　8．09

お金はどこで造っているでしょう？――「工場だろ。」――・・・――工場でな，お金をな，好きなだけ造っていいと思う？――「いいと思うよ。」――いいと思う。――「いけんと思う，いけんと。」――なんで，なんで？――「あっ，いいと思う。」――なあ，どっち？――「いい。いい。」――いい，なんで？――「えーとな，そしたらな，いろんな人に分けれるけ。」――そうか。――「いっぱい造ったら。」――じゃな，どれだけお金を造るかを誰が決めると思う？――「えー，あのー，ここの工場の一番偉い人。」――ふーん，そうか。じゃ，お金をな，どんどんどんどん造っちゃったらな，どうなると思う？――「えー，もう機械がぶっ壊れてな，で，もう家がな，キューッて煙が出て壊れちゃう。」――壊れちゃう？――「うん。働きすぎて，機械が。」――じゃあ，お金をな，どんどん造ったらな，みんながお金持ちになれると思う？――「な，なれんと思う。」――なんで？――「え，世界中に何人もおるけ。」――じゃあな，だけ，いっぱいいっぱいいっぱい造るんで？――「うーん，ふつうの暮しになる。」――みんなが？――「うん。」

本児にとっても社会全体を考えることは困難である。お金を好きなだけ造っていいかと聞かれて，本児は迷う。そして，いろんな人に分けれるからいいと考える。「いい」というのは，不都合がないという意味よりもむしろ善の意味と思われる。お金をどんどん造ってどうなるかについては，社会よりも機械のことに目がいく。しかし，みんながお金持ちになれるかを聞かれて，やっと世界の大勢の人のことを思い浮かべる。その人達に見合うだけお金を造ることは，本児には想像しがたいこ

となので，せいぜいみんなが「ふつうの暮しになる」ことを思い描くので精いっぱいである。

銀行

I．M．(M)　8．10

お金はどこで造っとるんだろうなあ？――「銀行。」――じゃ，銀行ではね，好きなだけ造っていいのかなあ？――「そういうのじゃなくてなあ，造る量が決まっとる。」――じゃあ，なんで決まっとるんだろう？――「えとな，多すぎたらな，えとな，持っとくっていうか，そういうのがないけえな，いけん。」――じゃあね，その決めるのは誰が決めるんだろう？――「わからん。」――わからんか？――「あっ，えとなー，造る人がな，なんか話し合って決める。」――・・・――お金がいっぱいになったら，みんながお金持ちになれるかなあ？――「えとな，いろんな人がいっぱいおるけえな，そう簡単になれん。」

本児は，お金は銀行で造られていると思っている。銀行は私的な機関であるが，そうかといってそこで勝手に好きなだけお金を造ってはいけない気がする。その理由は，保管が困難だからではないかと考える。経済的な関係を考えることができない以上，経験的な理由を求める他はない。また，お金を造る量は造る人みんなで決めるという。これも経験的にいい決め方とされているものである。お金がいっぱいになってもみんながお金持ちになれないのは「いろんな人がいっぱいおる」からというのも，具体的な経験に依拠した判断である。経験を越えることは，まだ本児には難しい。

国

U．N．(F)　8．06

お金というのはどこで造っているのかな？――「銀行。」――・・・――お金をね，どんどん造ったらどうなると思う？――「貯る。」――ほんとー。いっぱい造ったらなー，回りがなーどうなると思う？――「国がお金持ちになる。」――そう。そうしたら，みんながお金持ちになるのかなあ？――「(うなずく)」

回りがどうなるかと問いかけられて，本児は「国」のことを考えた。個人的な関係から社会的な関係へと表象は変化し始めている。

売買

N．R．(M)　8．06

（お金の絵を見せながら）これ金の札束な，金はどこで造っとるだろう？――「工場。」――その工場はどこにあるんだ？――「えっ，たぶんな，東京とか。」――工場いっぱいある？――「えっ，いっぱいある。」――それを工場では，お金を好きなだけ造ってもいいか？――「いや，量が決まっとる。」――誰が決めてんだ？――「えーっと，天皇陛下やとか他の国の偉い人とかや，あとわからん。」――お金を造る量は決まっとるのはどうして？――「えっ，それ以上増えたらみんなお金持ちになる。」――困る？――「うん。」――どうして？――「え，みんなお金持ちになったらいけん。」――そか。なんで？――「置く場がなくなる。」――置く場ぐらいいっぱいあまってんぞ。――「でもみんなが買いまくったら，果物やが減っていく。」――じゃな，お金をどんどんどんどん造ったらどうなっちゃうかな？――「え，みんなが大金持ちになる。」

子供は往往にして所与の事実を変えてはいけないと考える。海の大きさが決まっているように，金持ちの数もある程度限られたものでなくてはいけない。その理由は後から考えられる。もちろん，「置く場」だけを理由にしてはおかしいことは，本児も感づいている。理由はいろいろ考えられる。「みんなが買ったら物がなくなる」というのは，もっともな理由である。

社会的な経験への引き寄せ

K．Y．(F)　9．09

お金はどこで造ってるんだろう？――「銀行でもないし,... えーっ，どっかの工場。」――・・・どれだけお金を造るかは誰が決めると思う？――「えーっとね,... たぶんね，そこのね，お金造っとる中の人。」――中の人ってどんな人かな？――「そん中のね，社長さんとかね，なんかそういうふうな人。」――・・・――じゃあね，お金をどんどんどんどん造ったらどうなるかな？――「えーとね,」――お金の量は？――「増える。」――増えるか。そしたらどうなるかな？――「どうなるかなるかなあ...」――そしたらね,お金をどんどん造っていったらみんなお金持ちになれるかなあ？――「なれるかなあ？」――どうかなあ？――「お金持ちになれない。」――どうして？――「えーとね,」――どうしてだろう？――「えーとね，なんかね，お金持ちの人が欲張るから。」

本児も具体的な経験に引き寄せて，思考を巡らせている。お金をどれだけ造るかは，生産に当たっている工場の人が決めるし，みんながお金持ちになれないのは，お金持ちの人が欲張るからと考える。

F．H．(M)　10．00

（お金の絵を見せながら）これ何？――「お金。」――うん。お金っていうのはどこで造っていると思う？――「銀行。」――どこの？――「いろいろな銀行。」――じゃあね，銀行でね，お金を好きなだけ造っていいと思うか？――「思わない。」――なんで？――「好きなだけ造ったら，みんなまとめんといけんのに，トラックとかに入らん。」――トラックに？――「うん。とか箱に入らん。」――じゃあなー，どれだけお金を造るかっていうのは，誰が決めると思う？――「銀行とかお金を造る社長さん。」――そうか。じゃあね，お金をどんどん造っていったらどうなると思う？――「家とか，いろんな物買ってあるから，自分たちの寝る場が狭くなる。」――そうか，じゃあね，お金をいっぱい造ったら，みんながお金持ちになれるかなあ？――「なれない。」――なんで？――「働けない人もいるけ。」――じゃあな，働いとったらお金持ちになれるの？――「なれん。」――なんで？――「小さい会社の人もいるけ。」――なんで？――「小さい会社だから，あんまりもらえん。」

本児は，与えられた前提から社会的な結果を導き出すことができないでいる。お金をいっぱい造ると，自分たちの寝る場所が狭くなる。働けない人もいるから，あるいは小さい会社の人もいるから，みんながお金持ちになることはできない。こうした思考は生活実感のこもったものである。しかし，社会的な課題を与えられても，経験的な場面に束縛されて，思考が課題を受け止めきれないところに本児の限界が認められる。とはいえ，本児は，狭い個人的な関係に留まっているわけではない。小さい会社や働けない人のことを考えられるところに，社会認識の芽生えが見られる。

T．N．(M)　11．03

(お金の絵を見せながら)お金ってどこで造る？――「日本銀行じゃなくて，大蔵省印刷。」――・・・――そこではな，お金を好きなだけ造ってもいい？――「えー，決められた分だけ。」――・・・なんで決められた分だけしな造れんのかな？――「だって，造りすぎるとなあ，破れる分も今度多くなって，あんまり造りすぎるとなあ，なんか不良品とかそんな見分けるのも大変だしー，1日じゃできんかもしれんしー。」――もっと他には理由はないかなあ？何でいっぱい好きなだけ造ったらいけんのかなあ？好きなだけ造ったらいいんじゃない？――「好きなだけ造ったら多くなり過ぎて，それが，だけ，あれ，人が持ってるなあ，分量が多くなっちゃうしー，」――じゃな，お金をどれだけ造るかって誰が決めると思う？――「や，それは，国の責任者とか天皇とかじゃないの？」――国の責任者って誰？――「総理大臣とかじゃない？」――じゃあね，お金を，さっきも言っとったけどな，どんどんどんどんなあもっと造ってもええことになってなあ，造ったらどうなるの？――「ありあまりすぎて捨てる人も出るんじゃないの？」――あー，お金を捨える。なんかすごいもったいない話だなあ。お金を捨てるようになるんかあ。じゃあな，みーんながお金持ちになれるか，どんどんどんどん造ったら？――「そういうことはないと思うな。」――そういうことはないか？――「努力，あー，働いたりせん人はせん人で，した人はした人でどんどんもうかると思う。」

本児は，質問に答えるときによく疑問文の形を使う。生意気な形ではあるが，相手にも問い返していけるという対話の力量の証左の1つになっている。また，思考するときに，本児は条件を用いている。働いた人と働かなかった人との間に区別を設けようとしている。条件を用いて考えられるということは，思考の発達上重要な進歩である。

③社会が客観化され表象されるようになると，お金の増減を通して経済的関係が考えられるようになる。

お金と物との関係

O．A．(M)　10．00

お金はどこで造っとるのかなあ？――「工場。」――どこにある工場？――「なんか東京でスイバイショ（刷る場所？）っていうのがあって，そこで確か造っている。」――・・・そこではな，お金を好きなだけ造っていいのかなあ？――「決まってる。」――決まってる。どうして決まっとるの？――「そりゃな，どうでも造っていいんなら，お金が増えすぎて，物がなくなるから，それだからちょっとずつ，10円とか1000円とかを造っている，決めて。」――じゃあな，どれだけお金を造るかは誰が決めると思う？――「社長さんとか。」――どこの社長さん？――「工場の。」――じゃあな，もしもな，どんどんどんどんお金を造ったらどうなると思う？――「言ったよ。」――ん？――「言ったよ。」――言ったかいなあ？――「はい。」――あ，もう1回言ってみて。――「えっ，あんね，造りすぎたらね，物，物がね，買いすぎてなくなるから。」――あー，どんどん造った物を買いすぎちゃってなくなっちゃう。何がなくなる？――「店の物。」――もしもな，えっと，お金をどんどん造ったら，みんながお金持ちになれるのかな？――「そんなことはない。」――そんなことはない。どうして？――「えっ，サラリーマンとかそういうのはね，あの，仕事を途中で休んだりする人がいるから。そういう人はお金がもらえないから。」

本児は社会的にものを考えることができる。お金を売買関係の中に位置づけて判断している。そのため，お金の量が増大して物を買う人が増えれば，売る物がなくなってしまうと考える。社会的な関係について考察しているのである。しかし，みんながお金持ちになれるかという話になると，個人的経験ないし伝聞に後退してしまう。仕事を休むサラリーマンのイメージが優勢になる。

A．Y．(M)　11．03

お金はどこで造ると思う？――「銀行だな，やっぱり。」――・・・――そこじゃな，お金を好きなだけ造ってもいいかあ？――「決まっただけ。」――誰が決めるだ？――「人だ。人間。」――なんちゅう人が決めるだ？――「偉い人が決める。」――偉い人って誰？――「人間。」――えー，人間っていったって偉い人だろう？偉い人って誰だあ？――「とにかくなあ，銀行で一番偉い人。」――・・・じゃあな，お金をどんどん造ったらどうなると思う？――「みんなが金持ちになって，」――おー，みんなが金持ちになっちゃうか。いいなあ。――「買う物がな，もう安くなっちゃってなあ，」――あー，買う物が安くなるん？――「もうなあ，スーパーマーケットの物がなくなってなあ，仕入れのお金もなくなってなあ，あー，いっぱいになってなあ，どんどんなって売れずに最後に売れずに，そのまま。」

本児は，お金をどんどん造ったらどうなるか聞かれて，明らかに社会を表象して答えようとしている。個人的な関係だけが思い浮かべられるようなことは，すでになくなっている。しかし，お金が増えることと物が増えることとが混乱してしまっている。お金の量と物価との関係の正しい理解のためには，社会科学の学習の心要であることを示している。

道徳的な発想による科学的思考の妨害

M．S．(F)　11．07

お金を好きなだけ造っていいかな？――「いけない。法律がある。」――お金を好きなだけ造っちゃいけないって法律があるの？――「あるの。」――じゃね，どれだけお金を造るか誰が決めると思う？――「あのー，国で偉い人。」――誰，偉い人って？――「天皇。」――・・・お金をどんどん造ったらどうなるかな？――「えっと，お金にばかり頼ってね，いけない世の中になる。」――いけない世の中になる？――「うん。」――みんながお金持ちになれるかな，お金がいっぱいできると？――「あの，お店とかで買ったりしたら，お金とか自分で造ったりできるからなれる。」

本児は，社会を表象する力は持っている。しかし，道徳的な考えが優先して，客観的な判断に向かう前に善悪の価値的な判断で済ましてしまう。社会的な思考は妨げられている。

F．N．(F)　11．06

お金はね，好きなだけ造っていいと思う？――「そういうのは犯罪になるから，やっぱり自分で働いた方がいい。」――あーそうか。お金をね，好き勝手にね，造る所がね，たくさん造っていいと思う？――「いけないと思う。」――なんで？――「そういっぱい造るなら，誰だって造るし，そんなに増えたら自分が駄目になる。」――そうか。じゃあね，お金をどれだけ造るかっていうのは誰が決めると思う？――「日本の天皇陛下とか。」――他には？――「その下の人とか。」――どんな人？――「大臣とか。」――そうなの。そのなー，お金をどんどん造ったらどうなると思う？――「もし

貧しい人が造ったらその人はお金持ちになるし，お金持ちが造ったらもっとお金持ちになるから，あんまりそういうことはやらない方がいい。」――そう。でもお金持ちになったら裕福になるからいいじゃない？――「でもそれだけ自分が怠けるし，駄目になる。」――そうなの。もしいっぱいお金を造ったら，国の人はみんなお金持ちになれると思う？――「たぶんなれる。」――それはどうして？――「それだけ造っているのだし，だから...」

本児も価値的な判断が優先し，社会を客観的に捉えることを妨げている。社会的関係を表象できるようになったら，自動的に社会に対して客観的に思考できるかというと，そういうことはない。

討　論

社会を認識するためには，社会が客観化されなくてはいけない。しかし，子どもにとって，これは困難な課題である。本報告の資料は，それを如実に示している。子どもは，思考活動に際して，はじめ個人的な経験を基礎にして場面的な表象を行う。社会的な出来事について質問されても，社会的な関係を思い浮かべることは難しい。社会的関係は，個人的な関係と等質なものとして，個人的な関係の延長線上に類推される。自分が貯金するとお金が貯るように，みんなも貯金によってお金持ちになることができると考える。自分にお金がなくなったら貧乏になるように，世の中からお金がなくなったらみんな貧乏になると思う。自分がお金を造れたらお金持ちになれるように，お金をどんどん造ったらみんながお金持ちになると思う。社会が社会として表象されることはない。

ところでこうした思考の基礎には，「対」という構造を持った言語（思考の手段，概念装置に準ずるもの）が存在している。ワロンは，「対」について次のように説明している。

「子どもの思考は，その端緒においてさえ，まったく体系化されていないわけではない。ただし，経験的なものや主観的なものに起源をもつ組織――子どもは，対象に接触したり，出来事に慣れ親しんだりすることによって，これらの組織を相互に併置できるようになるのだが――にもとづく内容だけが問題なのではない。それら諸組織は，そのものだけでは，真の統一原理をもたないで，あちこち入れ替わったり，凝集したりするような精神的諸契機の無形のつながりに過ぎないであろう。じじつ，思考は，思考が事物の中に導入する構造によってのみ存在する。まずはじめは，きわめて初歩的な構造である。さいしょに確かめることができるものは，対になった二つの要素の存在である。思考の要素とは，この二元的構造であって，この構造を構成する要素ではない。「二」が「一」に先立つ。対，すなわち組は孤立した要素より先にある。思考によって識別できるすべての項，考えることのできるすべての項は，それと分化して対立し得る補足項を必要とする。」[6]

こうした対の存在は思考の端緒にとって重要ではあるが，それは同時に思考を閉じ込める働きもする。お金を造ることが，保管することと結び付いて現れると，お金をどんどん造った場合を尋ねられても保管のことだけが気になって，他の思考は起こらなくなる。お金が食べ物と結び付いていると，世の中からお金がなくなるとみんな飢死してしまうことになる。思考が発達し認識となるためには，対が乗り越えられなければいけない。

「子どもの思考が，会話のすじみちあるいは事物の輪郭をより正確にたどっていけるようになる

ためには，その思考を対称的な二つの項のなかにいつもとじこめる，この二元的な構造からぬけだせるようになることが必要であろう。しかし，子どもの思考は，この初歩的定式から一挙にぬけだせないし，また，対というこの原初的分子を一挙に分割することもできない。そのため，対の各項を自由な状態にすることもできないし，思考のテーマを正確に描写し展開する諸要素にしたがって，これらをとりまとめることもできない。」[7]

対による思考が乗り越えられていく有様は，本研究の資料においては各質問項目とも段階2によく現れている。質問Aの「みんながお金持ちになれるか」という問題では，自分たちも含めた，お金持ちでない人，様々な人々の生活を知っていくことが，思考の発展の契機になった。質問Bの「世の中からお金がなくなったら」という問題では，お金がないときの様々な場面の経験と想像が，社会に対する洞察に役立っている。質問Cの「どんどんお金を造ったら」の問題では，お金を造ることに関して，工場や会社，銀行に対する知識が思考のよりどころになったし，物の売買に関する経験も重要な働きをした。

このように，確かに，経験や知識の広がりは，対を乗り越えていく際の不可欠の契機ではある。しかし，いかなるものでも経験を積み知識を増やせばいいと言うものではない。社会認識に関しては，社会認識特有の契機がある。本研究の資料からは，「労働」と「小社会」を考えることの意義が示唆される。社会的経験を一般化することなしには，社会認識には到達しない。それが可能になるためには，場面的経験を一般的認識につなげる媒介項が必要である。その媒介項の役割を果たすのが，「労働」と「小社会」ではないだろうか。

第3段階は，社会認識の第1歩である。ここに至って，社会的関係が個人的関係と区別され，客観化される。しかし，これは第1歩ではあるが，同時に第1歩でしかない。社会が客観化され思考の対象になり得たからといって，そこからすぐに正しい社会認識，科学的な社会認識に到達できるというものではない。それには，独自の努力，社会科学の学習が必要なのである。

注

(1) ピアジェの認識論については数多くの文献が出ている。同化と調節に関しては，次のものが参考になる。
Piaget, J.　滝沢武久訳　思考の心理学　みすず書房　1968
Piaget, J.　滝沢武久訳　思考の誕生　朝日出版社　1980

(2) 思考の発達における概念装置（言語）の役割については，ワロンの分析が優れている。本研究においても次の文献に学んだ。
Wallon, H.　滝沢武久・岸田秀訳　子どもの思考の起源　上中下　明治図書　1968

(3) 場面に拘束された思考については，漁村の児童の調査においてすでに言及している。
田丸敏高　対話事例にみる児童の社会認識の発達　鳥取大学教育学部研究報告（教育科学）　29－1　1987

(4) 価格の理由を理解することの困難性については，これまでも何回か触れてきた。
高取憲一郎・田丸敏高　児童・青年の地域概念の発達　特定研究報告「学校教育と地域社会」所収　鳥取大学教育学部　1986
高取憲一郎・田丸敏高　児童・青年の地域概念の発達(1)(2)　日本教育心理学会　第28回総会　1986
田丸敏高　児童の社会認識に関する発達的研究　日本教育心理学会　第29回総会　1987
田丸敏高　児童の社会認識に関する発達的研究　鳥取大学教育学部研究報告（教育科学）　29－1　1987
文献(3)でも検討している。

(5) 女児で年齢は5歳3カ月であることを示す。なお，以下，（M）は男児，年齢の後に（R）とある場合は遅滞

児を示す。

(6)　文献(2)上　80 P

(7)　文献(2)上　91 P

(昭和63年 4 月20日受理)